

私の京都

シャルル・ドロコヴスキ

1

日本でエッセイというと私はまず清少納言の枕草子を思い浮かべる。
清少納言のように私の感じた京都を書いてみる。

1.春はアーベントロート…。

それは山の後ろに太陽が沈む時間。

大岩山で折りたたみ椅子に座ってコーヒーを飲む。

少し寒いから、ダウンジャケットを羽織る。

彼女の顔はピンクに染まる。

茶色い目には山頂と京の街が写っている。

夏は湿度が高い。

子供の頃、住んでいた島を思い出す。

秋はここでは遅くやってくる。

冬は寒くなると石油ストーブをつける。

ストーブの上にやかんを置いて、お茶の時間を待つ。

(…)

11.山は大岩、稲荷、比叡、鞍馬、愛宕山

ずっと山に囲まれた場所に住んだ人は平原には住めないだろう。

峰は彼らの目印

時には危険なあの場所で色々な事と物を発見できる。

京の山はそんなに高くなくても、そんなに小さいわけではない。

見くびったら、危険だ。

(…)

12. 峰は頂上、山頂、頂、てっぺん。

(…)

16.海は京都にもある。

(…)

2

24. 木は植物界。

ここの植生はスイスのそれとは随分違って、もう一度、一から勉強しなくては行けない。

シダ植物 裸子植物 被子植物

野山に分入って見分けて、分類して、整理して、それでもうまくできずに迷ってそのままになることもある。

豊かな植生は子供の頃をよく思い出す。

種類は違えども幼少の頃住んだ島と、同じ匂いと香りがする。

家のそばの竹林の中には、その中を竹に侵食された空き家がある。

それは串刺しのようで恐ろしい。

裸子植物。

銀杏はまだ食べたことはない。おいしいのだろうか。
名の知らぬ珍しいヒノキ科の木がうちの近くにある。
ソテツを見ると、異国情緒を感じる。
他にシダ類、ヤシ類、マツ類
御香宮神社のソテツは樹齢400年ぐらいらしい。
ソテツの中には樹齢が1000年のものもある。
被子植物。
キク類、ヤツデ属、ヤツデ。
植物と文化の関わりにも興味がある
例えば、ヤツデは「天狗の羽団扇」という妖怪の昔話に出て来る。
ヤツデを使って扇子のように仰ぐと、鼻が高くなったり、低くなったりする。
大葉シダ植物。ゼンマイの新芽の渦巻きを見ると、私の頭もグルグル回ってくる。
(…)

48. 鳥は動物界。

「島」の漢字を見るといつも「鳥」をイメージする。
私だけじゃないだろう。
そして色々な鳥の音が聞こえてくる。
では島はいったいどんな声で鳴くのだろう。
先日、川のそばでサンドイッチを食べていた時、突然鳥が飛んで来てそれを奪っていった。

3

手でしっかりもってたのに
でも取られてもよかったのだ
初めてだったから、とてもびっくりして、どきどきした。
そして一人で大笑いした。
今でもどんな鳥だったか全くわからない。
今度からは気をつけよう。
スズメ目。
「ホーホケキョ」と、うぐいすはさえずる。
谷渡りの「ケキョケキョケキョ」も美しい。
声は聞こえど決して姿をみせない
あの鳥は私達をどこかからじっと見ているにちがいない。
スズメ目。
ハシブトガラスとハシボソガラスはよく見かける。
たまに口にプラスチックをくわえていて
それを見ると心配になる。
その二匹のスズメ目は留鳥だ。
おうむ目。
毎日他の人の言葉の発音や表現をおうむ返す。
(…)

50. 虫は節足動物。

野原や森の近くをあるくと、蝶やトンボとよくぶつかる。
無数の虫たちは好き勝手に飛び、互いにぶつかり合う。

まるで私など存在しないかのように。

ハエ目。

蚊はすごい。

普通虫は雨の日は飛べない。

蚊は雨が降って水滴が体についても、それを弾いて飛び続ける。

小林一茶の俳句に

：「涼しさは蚊を追ふ妹が杓子哉」がある。

蚊にとって怖いのはどっちだろう。

カメムシ目。

ある本によるとツクツクボウシの鳴き声はツクツクホーシだが、本当はもつと長い

：ジー…ツクツクツク…ポーシ、ツクツクポーシ、ウイヨース、ジー…

蛍、蛍雪、雪。

4

(…)

222. 桂川、西高瀬川、鴨川、高瀬川、高野川、宇川、高瀬川。

「川の流れのように」という曲は心を打つ。

(…)

223. 里は京都。

好きな名前がある。

京子(きょうこ)、京香(きょうか)、都花(いちか)など。

徒歩や自転車で移動するとき街中の狭い路地でいろんな建物をみる。

たまに神社やお寺のそばに止まって中に入る。

美術館、図書館、レストラン、本屋、様々な店、美容院、病院。

人が多い時はちょっと疲れるが

ここではビル街でもなぜか森の中のように感じる。

紀貫之の「土佐日記」という小説で初めて京都のことを知った。

« 京に踏み入ってうれしい。家に着いて、門を入ると、月が明るいので、たいそうよく様子が見える。

うわさに聞いていた以上に、話にならないほど壊れ傷んでいる »。

いまでもよく覚えている。

それで「物の哀れ」の意味を学んだ。

この街に来ていろんな人と出会った。

例えばKICAの日本語の先生方、銭湯の番頭さん、最近大好きなその銭湯で働きはじめた。そして友達も少しできた。

日本に来て10ヶ月、私の京の暮らしが少しずつ賑やかになってくる。

(…)

323.

大岩山で、コーヒーを飲んでいるあいだに夜になった。

暗くても見える

彼女の茶色の目を通じて、よく見える。